

古記録における「漸」と「漸漸」の意味・用法について

原 卓 志

目次

はじめに

- 一、中国古典における「漸漸」
- 二、「漸」と「漸漸」の使い分け——その一——
- 三、「漸」と「漸漸」の使い分け——その二——
- 四、「漸漸」の読み
むすび

はじめに

平安時代から鎌倉時代にかけての公家日記や古文書など、いわゆる古記録において、「動作や状態の変化が緩慢であること」を意味する副詞として「漸」「漸漸」と漢字表記される語が用いられている。「漸」字は、古辞書に搭載された訓をはじめ、訓点資料の付訓例や『今昔物語集』の送り仮名などから「ヤウヤク」と読まれたことが認められるが、「漸漸」という漢字連続（これを疊字「漸漸」と呼ぶことにする）については、どのように読まれるものなのか、すなわち、訓読されて「ヤウヤク」と読まれたのか、あるいは音読されて「ゼムゼム」と読まれたのか明確ではない。

古記録における「漸」と「漸漸」の意味・用法について

峰岸明氏は、疊字「漸漸」を漢語として捉えられ、漢語「漸漸(ゼムゼム)」が平安時代の古記録に広く用いられていることを指摘された。そして、漢語「漸漸」を記録特有語とされ、同様の意味を有する仮名文学語「ヤウヤウ」と漢文訓読語「ヤウヤク」とともに、三位相對立の用語として位置付けられた。⁽¹⁾

公家日記に見られる疊字「漸漸」の用例数を調査すると、「ヤウヤク」訓を担うと考えられる「漸」字の用例数に比べて著しく少ないことがわかる。例えば『小右記』では「漸」字が約八〇例見られるのに対して、連文「漸漸」は二例の使用を認めるのみである。その他の公家日記でも次のようになっていた。⁽²⁾

権記	「漸」二〇例・「漸漸」一例	殿曆	「漸」七例・「漸漸」一例
左経記	「漸」一三例・「漸漸」一例	永昌記	「漸」一四例・「漸漸」〇例
春記	「漸」二二例・「漸漸」一例	長秋記	「漸」二七例・「漸漸」〇例
帥記	「漸」二二例・「漸漸」三例	兵範記	「漸」二二例・「漸漸」二例
中右記	「漸」一六三例・「漸漸」三例	台記	「漸」二八例・「漸漸」三例

漢語「漸漸」が記録語として、仮名文学語・漢文訓読語との三位相對立の用語のうちの一、一位相を代表する副詞であるとするならば、このような「漸」字との用例数の差は何を意味するのであろうか。はたして「ヤウヤク」訓を担う「漸」字と疊字「漸漸」は、意味・用法の上でどのような関係を有していたのであろうか。

本稿は、このような問題を明らかにするために、平安時代から鎌倉時代の古記録において、「動作や状態の変化が緩慢であること」を意味する副詞として用いられた「漸」字と疊字「漸漸」の意味・用法を検討することによって、その使い分けについて考察する。

一、中国古典における「漸漸」

古記録における「漸」字と疊字「漸漸」との使い分けを考える前に、中国古典における疊字「漸漸」の使用実態を概観しておきたい。

管見の及んだ範囲では、後漢荀悦の『前漢紀』に見られる疊字「漸漸」の例が、漢籍における「動作や状態の変化が緩慢であること」を意味する最古の例であると見られる。前漢以前の漢籍には、「山の高く峻しいさま」「麦の芒の伸びたさま」「涙の流れるさま」を意味する疊字「漸漸」の例が認められるが、「動作や状態の変化が緩慢であること」を意味する例は認められない。後漢以降、六朝時代から唐までの漢籍には、次のような例が見られるが、その使用例は多くない。

○廣僞死、漸漸騰而上馬、抱胡兒而鞭馬、南馳、（前漢紀卷第十二・孝武皇帝紀三）

○永元三年夜、天開黃色明照、須臾有物、絳色、如小甕、漸漸大如倉廩、聲隆隆如雷、（南齊書卷第十三・天文志下）

○軍有黑氣、如牛形、或如馬形、從氣霧中下、漸漸入軍、（隋書卷第二十六・天文志第十六）

○今日出於東冉冉轉上、及其入西、亦復漸漸稍下、（晉書卷第十一・天文志上）

○請劍舞爲歡、稜從之、如於是舞刀爲戲漸漸來前、稜惡而呵之、不止、（晉書卷第一百・王如列伝）

○燕臺上客意如何 四五年來漸漸疎 （杜牧「寄浙西李判官」・杜牧詩集卷五）

前漢以前の漢籍に見られる疊字「漸漸」の例は、次に掲げるような例である。これらは「動作や状態の変化が緩慢であること」を意味する「漸漸」と音が異なっており区別される。⁽³⁾

《山の高く峻しいさま》

○漸漸之石、維其高矣、（毛傳）漸漸山石高峻、（鄭箋）山石漸漸然高峻（毛詩卷第十五・小雅・漸漸石）

古記録における「漸」と「漸漸」の意味・用法について

《麦の芒の伸びたさま》

○乃作麥秀之詩、以歌詠之、其詩曰、麥秀漸漸兮、禾黍油油、〔索隱曰、漸漸麥芒之狀（以下略）〕（史記卷第三十八・

宋微子世家）〔他に、潘安仁「射雉賦」〔文選卷第九所収〕・王維「送李睢陽」〔王右丞集卷六所収〕に例がある〕

《涙の流れるさま》

○涕漸漸其若屑（楚辭卷十六・「怨思」）〔他に、韓愈「苦寒」〔韓昌黎集卷四所収〕に例がある〕

仏書に用いられた疊字「漸漸」には、次のようなものが見られる。

○如是諸人等 漸漸積功德 具足大悲心 皆已成佛道（妙法蓮華經方便品第二）

○汝等所行 是菩薩道 漸漸修學 悉當成佛（妙法蓮華經藥草論品第五）

○如毒雖少亦能害人、如責雖少漸漸滋多、又爲患於人、人常不忘、（成実論卷第二十二過患品第一百二十一）

○若動觸起時、或從頭背腰肋足等處、漸漸遍身、（摩訶止觀卷第九上）

○（觀仏三昧經云）後時、梅檀根芽、漸漸生長、纔欲成樹、香氣昌盛、（安樂集卷上）

○今日、定死不疑、正欲到廻、群賊惡獸、漸漸來逼、（觀經四帖疏・散善義卷第四）

右に掲げた例の他に、『地蔵十輪經』『百法頭幽抄』『法華經玄贊』『大日經義積』など、六朝時代以降の漢訳仏典・仏典注釈書にその使用例を見出すことができる。

「動作や状態の変化が緩慢であること」を意味する疊字「漸漸」が、前漢以前の漢籍に見出せず、それ以降の漢籍にも使用例が少ないのに対して、漢訳仏典・仏典注釈書などの仏書に多くの使用例が見られることからすれば、疊字「漸漸」が「漸」に対する六朝時代頃の口頭語的な性格をもった表現であったことが想像される。しかし、なお漢籍にも後漢から六朝時代にかけての使用例が、少数ながらも認められることには注意しなければならず、一概に口頭語的な性格を有するものであったとも言い切れない。

中国古典における「漸」は、「やうやく、だんだん、次第に」などと現代日本語訳される副詞として用いられる他、「進む」「通ずる」「習ふ」などと訳される動詞としても用いられる。これに対し「漸漸」は、「やうやく、だんだん、次第に」と訳される副詞として用いられるが、動詞として用いられることはなかったようである。このように、「漸」の方が意味・用法が広いのであるが、「やうやく、だんだん、次第に」と現代日本語訳されるところの、「動作や状態の変化が緩慢であること」を意味する副詞として用いられる場合、「漸」と「漸漸」との間に、どのような意味あるいはニュアンスの違いがあるのか、判然としない。

次に掲げるのは、『妙法蓮華経』に用いられた「漸」字と疊字「漸漸」の例である。それぞれ「具」あるいは「具足」を修飾したもので、文脈から「次第に（大道・仏道・功德・菩薩道）を身につける」という表現であると解釈される。これらの「漸」字と疊字「漸漸」の間には、実質的な意味の差を見出すことができないように思われる。

○随佛所行 漸具大道 （授記品・偈）〈四字―四字〉

○修菩薩行、爲大法師、漸具佛道 （勸持品）〈四字―四字―四字〉

○漸具功德 疾成佛道 （常不輕菩薩品・偈）〈四字―四字〉

○漸漸具足 菩薩道已 （授記品・偈）〈四字―四字〉

○漸漸具足菩薩之道 （五百弟子受記品）〈四字―四字〉

○汝如是漸漸具菩薩道 （勸持品）〈三字―三字―三字〉

実質的な意味の差が見られないとすれば、『妙法蓮華経』ではどのような原則に従って「漸」字と疊字「漸漸」を使い分けていたのであろうか。ここで考えられるのは、字数合わせのための使い分けが行われていたのではないかということである。右の用例の下に、括弧で句ごとの字数を示したが、これらは四字または三字の句によつて構成されている。このような、句ごとの字数を合わせるために、「漸」字と疊字「漸漸」のどちらかが選択されたのではないかと考えるの

である。「妙法蓮華經」をはじめとして、漢訳仏典においては、四字・五字の句を重ねて經文を作ることが多い。特に偈の部分においてはそれが顕著である。また、仏典注釈書においても、先掲の『摩訶止観』『觀經四帖疏』のように四字・五字を基本として文章が構成されることが多いようである。すなわち、漢訳仏典や仏典注釈書における文章構成上の特徴が、「漸」字と疊字「漸漸」の選択基準になっていたのではないかと考えられるのである。この文章構成上の字数の問題からすれば、杜牧詩のような漢詩に用いられる疊字「漸漸」も同様に捉えることができる。ただし、その他の漢籍（史書）に用いられた疊字「漸漸」については、字数合わせという原則を当てはめるわけにはいかない。この点については、今後更に用例を収集して、検討してみたい。

二、「漸」と「漸漸」の使い分け——その一——

中国古典における「漸」字と疊字「漸漸」の使い分けの原則に、字数合わせのための使い分けが見られるとすれば、我が国の「漸」字と疊字「漸漸」の使い分けにもその影響が見られるのではないだろうか。特に、字数に配慮して作成される文章に使用される場合には、当然考えられることである。

このような字数合わせのための使い分けを想定した場合、『菅家文章』『菅家後集』などの日本漢詩や『本朝文粹』『鎌倉遺文』所収の願文、『金澤文庫本言泉集』所収の表白に使用された疊字「漸漸」の次のような例は、字数合わせのために選択されたものであるといえよう。

- 此間勝境雖無主 漸々聞來欲有妨 (菅家文章卷第四「遊覽偶吟」)
- 山疑小雪微微々積 水誤新氷漸々生 (菅家文章卷第四「冬夜對月憶友人」)
- 微微拋愛樂 漸々謝葦臚 (菅家後集「叙意」)
- 枯株漸々雖衰朽 此節芳顏歲々同 (本朝無題詩卷三「尋山花」)

○半錢所施、一粒所捨、漸々合力、微々成功、(本朝文粹卷第十三・善道統「為空也上人供養金字大般若經願文」)

○種々方便力 漸々令離苦 (鎌倉遺文〈二一八四七〉元寇祈願文・文永十二年)

○設種々方便 漸々令發心 (鎌倉遺文〈二四〇七八〉生惠写經願文・弘安三年)

○漸漸練磨故 不起犯戒心 (鎌倉遺文〈二二二二四〉道基写經願文・正安四年)

○然後、漸々功業成辨、卷々紺帟皆具、而已 (金澤文庫本言泉集・六六上)

○年々致力、漸々積功、今年之春、塔婆成矣、(金澤文庫本言泉集・一六八下)

更に、「往生要集」『大日本国法華經驗記』もその文章構成が漢訳仏典に近いものであり、そこに用いられた「漸」字と疊字「漸漸」にも字数合わせの使い分けを認めることができよう。

○彼如洗繩置睫、猶盃厭、況復刀山火湯、漸將至、(往生要集卷上) 〈六字―三字―六字―三字〉

○又漸廻眸、遙以瞻望、彌陀如來、如金山王、坐寶蓮華上、處寶池中央、(往生要集卷上) 〈四字―四字―四字―四字―四字―

五字―五字〉

○即從菩薩、漸至佛所、(往生要集卷上) 〈四字―四字〉

○復行三十六億由旬、漸漸向下十億由旬、(往生要集卷上) 〈八字―八字〉

○此諸有情、爲求舍宅、從彼出已、漸漸遊行、陷入其中、首足俱没、(往生要集卷上) 〈四字…四字〉

○若病者氣力、漸漸羸劣時、(往生要集卷中) 〈四字―四字〉

○漸留飲食、服粟一粒、(大日本国法華經驗記卷中・第四十四) 〈四字―四字〉

○漸行去間、於山野中、有一草庵、(大日本国法華經驗記卷中・第七十三) 〈四字―四字―四字〉

○漸漸遊行、經於多時、至平正處、(大日本国法華經驗記卷上・第十八) 〈四字―四字―四字〉

○漸漸生長、枝葉滋茂、開花結菓、(大日本国法華經驗記卷上・第三十七) 〈四字―四字―四字〉

古記録における「漸」と「漸漸」の意味・用法について

中にはいくぶん字数に外れる例も見られるが、この他に『本朝神仙伝』『拾遺往生伝』における疊字「漸漸」の使用も字数合わせにあると認められる。

このように「漸」字と疊字「漸漸」との使い分けの原則に、字数合わせによる使い分けがあると認められる文章は、漢詩や願文・表白など対句を重ねた美文意識の強いもの、また、『往生要集』『大日本国法華経験記』などのような仏典に似た文章構成を有するものという性格をもっている。これらの文章は、峰岸明氏の分類によれば、日本漢文のうちでも、漢文の作成を志向するものであり、中国古典の文章の用字・用語・文法に正しく準拠するもの（純漢文）、ならびに、純漢文の作成を目指しつつも、中国古典の文章には存しない用字・用語・文法を含むもの（和習・和化漢文）ということになり、⁽⁴⁾厳密には古記録と呼ばれるものには含まれない文章である。いずれにしても、疊字「漸漸」を使用する日本漢文のうち、中国古典の用字・用語・文法を含めた文章様式・文章構成の影響を大きく受けていると考えられる文章においては、中国古典における字数合わせの原則をそのまま受け継いでいるといえよう。

三、「漸」と「漸漸」の使い分け——その二——

「漸」字と疊字「漸漸」との使い分けの原則として、字数合わせによる使い分けがあったことは間違いないことであろう。しかし、これは中国漢文の作成を志向する文章であり、中国古典の影響を大きく受けた文章における使い分けである。いわゆる古記録と呼ばれる文章、すなわち公家日記や古文書など、字数に気を配る必要のない文章においては、このような原則は認められない。本節では、公家日記や古文書に用いられた「漸」字と疊字「漸漸」の意味と用法について分析を試みてみたい。

次に掲げる例のように「漸」字と疊字「漸漸」は、よく似た文脈で用いられており、「漸」字と疊字「漸漸」との間に意味的な差を見出すことは難しい。

《人々が次第に集まってくる》

「漸」

- 先是打鐘、僧等漸集會、(左經記・長元八年五月十六日)
- 上達部未被參、仍參着殿上談話頭辨之間、人々漸以參集、(帥記・寛治二年十一月二十日)
- 内大臣以下漸參集、(永昌記・長治二年正月二十五日)
- 此後人々漸參集、(山槐記・安元元年七月二十八日)

「漸漸」

- 先是、上達部四五輩被參向殿上、其後漸々人々參入、(帥記・寛治二年八月七日)
 - 自是以前參入之人、左衛門督許也、此後人々漸々參集、(帥記・寛治二年九月十六日)
 - 暫在殿上、舞人等漸々參集、(明月記・建仁二年三月二十六日)
 - 乘燭以後、左大將殿令參給、良久漸々參集、(明月記・建曆二年十月二十三日)
- 《ゆつくり歩く・ゆつくりと進む》

「漸」

- 次吉平朝臣立午前(壇上)披書讀之、漸歩入、(小右記・長和四年九月二十日)
- 漸進龍頭、着南庭東岸、(帥記・承曆四年四月二十八日)
- 入御自寝殿東妻、漸西行上(立)御座御拜舞、(長秋記・長治二年正月五日)
- 漸歩經透渡殿、(伏見天皇宸記・正応二年三月二十三日)

「漸漸」

- 携手足、石山漸々歩、(後二條師通記・寛治二年七月二十五日)

古記録における「漸」と「漸漸」の意味・用法について

○申云、小朝拜庭狹、因公卿多時、漸々北進、今□准漸々西進、有何難哉、(台記・康治三年正月一日)
 ○頗倚東漸々歩、(玉藻・安貞二年三月二十七日・割書部)

《病氣が次第に平癒する・重くなる》

「漸」

○座主御病漸以平復、度數多減者、(小右記・寛仁三年八月十七日)

○面疵漸減、夢藥驗歟、(小右記・治安三年閏九月四日)

○御堅根今朝汁出漸減氣也、昨日一昨日事外苦御坐也、(中右記・大治五年三月十三日)

○飲食不通、漸爲病遂終命云々、(明月記・正治二年正月二十九日)

「漸漸」

○風痺相侵、漸々倍增、(玉葉・承安二年五月十二日)

○疾體甚重、於面腫者漸々減氣、(明月記・安貞元年七月十七日)

○又去月始ヨリ腹痛、老體之間漸々ニ疲如此、(康富記・応永二十五年八月五日)

「漸」字と疊字「漸漸」とが、どのような対象に対して用いられているのか、つまり「何の動作」「何の変化」に対して使われているのかを調査すると、「漸」字は次のように「時間そのものの推移」や「天候の変化」をも対象とし、多数の用例が見られるのに対して、疊字「漸漸」にはそれが殆ど見られないことがわかる。すなわち、「漸」字が用いられる対象は、疊字「漸漸」が用いられる対象より広いという違いが存するようである。

《時間そのものの推移》

○社司不聞此告、不候社頭、仍令召遣之間漸及深更、奉幣、讀宣命、(小右記・正暦元年十一月十八日)

○邑上第九親王昭平、出家後漸以年久、然而可注无品昭平歟、(小右記・長和二年七月十七日・割書部)

○又炎旱漸及旬、定有世間之愁歎、(春記・長久元年六月十二日)

○白雪紛々、漸及已剋積欲盈尺、(中右記・嘉保二年十一月三十日)

○被仰云、待甘栗使來之間時刻漸押遷、爲之如何、(長秋記・永久元年正月十六日)

▽當社領内彼兩村、本依爲薄地、暫可爲五束代之由、雖被下知、漸々經年序之間、^{マコト}謬超他郷令興復云々、(鎌倉遺文

△七二一七) 小槻淳方下文写・建長二年)

▽其寺鐘付(鐘)人、此ノコロ夜々鬼來取食。依之(匠)人怖テ鐘ヲ付(鐘)不ズ成ヌ。漸々年中ニ成ヌレハ、此尾張翁

(翁)ノ此法師、名ヲハ道丈法師トナム云ケル、大衆ニ申様、(打聞集・二四三行)

《天候の變化》

○東方有黒雲、雨已漸欲降、(小右記・長和五年六月九日)

○寅剋立今祇園、道路之間漸雨降、不雷、(後一條師通記・寛治四年八月八日)

○及已剋許雲漸収雨已止、(中右記・永久二年正月一日)

○暫遊廻水上之間、微雨灑、漸及滂沱、(長秋記・元永二年九月三日)

○朝間微雨、已後漸止、未後天晴、(明月記・建久七年四月二十四日)

ところで、「動作や状態の變化が緩慢であること」を意味する副詞「ヤウヤク」を現代語訳する場合には、現代語「次第に」「だんだん」をあてて訳すことができる。しかし、「漸」字が「時間そのものの推移」を対象とした例の中には、「だんだん」をあてて現代語訳することができる。しかし、「漸」字が「時間そのものの推移」を対象とした例の中には、現代語「次第に」「だんだん」をあてることができない。しかし、「漸」字が「時間そのものの推移」を対象とした例の中には、

①主上自去三月之比不例御、…又以納殿唐綾四疋爲御幣、奉石清水(割書略)、賀茂上下(割書略)、北野(割書略)、有御祈(割書略)、漸及戌刻之間、遂崩於清涼殿、(左経記・長元九年四月十七日)

古記録における「漸」と「漸漸」の意味・用法について

- ② 予束帶參上、漸及巳時、而使并舞人已下未參入、頻雖遣催、未申返事々々、(春記・長曆三年十一月二十二日)
- ③ 漸及午四點而使未參入、頻遣召、猶不參入、尤懈怠也、(春記・長久元年十月二十七日)
- ④ 昨日左中辨經通云、足更不被踏立之由有命也、常臥不起給者、漸及卅日、尤是爲奇、有由緒歟、(小右記・長和四年七月十七日)

⑤ 大外記師遠申云、年々召名無備召之儀、近乃師遠居當職漸及三十年、其間一度無召之、更不可進云々、(長秋記・大治四年二月十七日)

①は主上(後一条天皇)が戌の時になる頃に崩御されたことを述べている。これを「次第に(だんだん)戌の時になる頃、清涼殿にて崩御なされた」とは現代語訳しにくい。ここでは「そろそろ戌の時になる頃」と現代語訳するのが適當であろう。②も「次第に(だんだん)巳の時になる。それなのに使いや舞人以下の人々は参入しない」とは現代語訳しにくく、「そろそろ巳の時になる」と訳すのが適當である。③も同様で「そろそろ午の四点になるといふのに」と現代語訳できる。④は「起き上がらなくなつてから、次第に(だんだん)三十日になる」といふ現代語訳よりも「そろそろ三十日になる」と訳す方が適當であり、⑤も同様に「そろそろ三十年になるが」と現代語訳するのが適當である。

現代語の「次第に」「だんだん」と「そろそろ」の違いは、「次第に」「だんだん」が次のa・bのような表現には用いられないのに対して、「そろそろ」がcのように用いられるところにありそうである。

- a × 次第に五時になりますから、出掛けましょう。
- b × だんだん五時になりますから、出掛けましょう。
- c ○ そろそろ五時になりますから、出掛けましょう。

すなわち、「次第に」「だんだん」は、「状態の変化そのものが緩慢であること」を意味するのに対して、「そろそろ」は「時間の推移(緩慢な状態の変化)の結果、特定の時刻が迫っていること」をも意味するという違いが見られるのである。

古記録に使用される「漸」字には、「状態の変化そのものが緩慢であること」を意味する場合と、「時間の推移の結果、特定の時刻が迫っていること」を意味する場合とがあり、後者の場合に「次第に」「だんだん」をあてることでは現代語訳しにくくなるのである。

直接に時間の推移を表現したものではないが、次の例もこれと同様に解釈される。

⑥ 亥終許歸家、漸着寢之間、女房北屋有火、予駈出見之、(春記・長暦二年十一月二十六日)

⑦ 亥時許漸付寢之間、南方有燒亡所、(中右記・承徳元年九月二十七日)

⑧ 其次勅問人々申趣、委被語仰、不能具記、漸爲御參内有御出立、仍退出、(平戸記・寛元三年正月十七日)

⑨ 未旦漸欲參、可被早參之旨、重相觸行兼朝臣之處、(園太曆・貞和二年九月十一日)

⑥⑦は「そろそろ寢ようとしたところ、火事があった」と現代語訳される。⑧は「そろそろ参内のためにお出かけするというので退出した」、⑨は「そろそろ参内しようとして、念のために早参の趣を告げ知らせた(連絡確認した)」と現代語訳される。これらの「漸」字は、「動作や行爲を行う『予定時刻』が迫っていること」を表しており、先の「時間の推移の結果、特定の時間が迫っていること」という意味と同列に解釈することができる。

古記録における「漸」字が「ヤウヤク」訓を担っていることからすれば当然ではあるが、古記録以外の文献にも「時間の推移の結果、特定の時刻が迫っていること」を意味する「ヤウヤク」「ヤウヤウ」の例が認められる。

○(夕霧)「…何ごとも、人により、事に従ふわざにこそはべるべかめれ。年齢なども、やうやういたう若びたまふべきほどにもものしたまはず、…」(源氏物語・横笛)

○よろづの殿上人・上達部、靡き仕(う)まつりてもてはやし奉り給ふ程に、やうく十二三ばかりに在しませば、御元服の事おほし急がせ給ふ。(栄華物語・巻第二)

○かゝる程に、日やうく辰の時ばかりになれば、上より、「この人くおそく参り給ふ」とある仰事、侍の人く、

古記録における「漸」と「漸漸」の意味・用法について

あるは刀自・すましなど、いち／＼にいひわたす。(栄華物語・卷第二十四)

○而ルニ、年漸ク廿四五ニ成ケル時、世ノ中ニ疫癘發テ死ル者多カリ。(今昔物語集卷第十七・第十八)

○此コソ腹立ドモ、夜前東ノ面ノ道ニテ、此ノ君達ノアダエシ氣色ハ、然モシテムカシト思ケレバ、漸ク末ノ時ニ成ル程ニ、何ガ有ラムト胸ツブレテ思ヒ合ヘリケルニ、(今昔物語集卷第二十八・第四)

○辰ノ時許ノ事ニテ有ケルガ、漸ク一時許不立ザリケレバ、女ノ童、「此ハ何カニト思テ、「ヤ、」ト云ケレドモ、物モ不云テ只同

ジ様ニテ居タリケルガ、漸ク二時許ニモ成ニケレバ、日モ既ニ午時ニ成ニケリ。(今昔物語集卷第二十九・第三十九)

○女出て「寝かせた子どもがやう／＼、お目があく事もあらふ」と云て、見まひに行、(天理本狂言六義上卷五十二

「子ぬす人」)

○「生れついた目くらさへあいたと云、身どもか目は、うぬしが是へきてからつぶれた目じや、やう／＼十年斗にならうかと思ふ」と云、(天理本狂言六義下卷八十一「川上」)

「漸」字すなわち「ヤウヤク」そして「ヤウヤウ」に、このような「時間の推移の結果、特定の時刻が迫っている」という意味が存するのに対して、疊字「漸漸」には、この意味で使用されたと解釈される例が見られない。このことからすれば、疊字「漸漸」は「動作そのもの、状態の変化そのものが緩慢であること」という意味を有するだけであつて、「時間の推移の結果、特定の時刻が迫っていること」という意味を有していないということにならう。この点が「漸」字と疊字「漸漸」の意味の上での相違点となる。

次に、「動作そのもの、状態の変化そのものが緩慢であること」という両者に共通する意味での使用例に注目すると、疊字「漸漸」には「漸」字に見られないようなニュアンスを汲み取ることができるように思われる。

⑩自貞永元年初秋中旬之比、至于同年玄冬之候、処々道場疑問感得之論義、漸々書置結聚一帖之雙紙畢、(東大寺図

書館本『華嚴宗疑問所得論義抄』奥書)

⑪自寛元々々年晩夏之比、南都北城之砌、講經談論之庭、不分自宗他宗、不論新疑古疑、処々問用之論義、漸々記録之畢、(東大寺図書館本『諸宗疑問論義抄第三』奥書)

⑫經論之所説、論義之問題、宗家之解釈、清涼之定判、処々之至要、漸々注之了、(東大寺図書館本『探玄記第十一卷要文抄下』奥書)

⑬抑此料紙者、去文永三年之曆暮秋九月之候、後嵯峨天皇所降賜也、不慮之朝恩、面目頗余身之間、漸々取出之、以寫如此之要書耳、(東大寺図書館本『華嚴祖師傳卷上』奥書)

⑭故大納言殿御記清書始、依本書狼藉也、：但依爲各大卷、忽不可急、漸々可書出也、(中右記・天永二年五月一日)

⑮今日於御堂東庭有御塔木造始事、近年以後有塔婆建立御願、漸々被用意其材木、(兵範記・仁平三年六月十三日)

⑯住人等伐掃荆棘、漸々耕作田畠、(平安遺文へ二〇二四)官宣旨・天治二年)

⑰五逆と謗法とを病に對すれば、五逆は霍亂の如して急に事を切る。謗法は白癩病の如し、始は緩に、後漸々に大事也、(鎌倉遺文へ一四四五)日蓮書狀・文永十年)

⑱から⑳の例は、いずれも宗性上人の手になる文献の書写奥書である。⁽⁵⁾⑩⑪⑫は宗性上人が諸処の論義の場で疑問に感じたこと、重要であると考へたことを「少しずつ、一つひとつ」書き留めたことを記している。また、⑬は後嵯峨天皇から下賜された貴重な料紙を「少しずつ、一枚一枚」取り出して、重要な書物の書写に用いたことを記している。これらの用例からは、疊字「漸漸」が使用されたことよつて、単に現代語「次第に」「だんだん」という言葉に置き換へることでは伝へられないニュアンスが伝わつてくるのである。すなわち、疊字「漸漸」には「動作や状態の変化の一つひとつ、一段階一段階を強調し、際だたせる」という効果があるように思われるのである。このように考へるならば、⑭は、急がずに「少しずつ、一卷ずつ」書写することを述べていると解釈されるし、⑮も「少しずつ、一本ずつ」材木を用意していったことが述べられていると解釈される。⑯⑰も同様に「(毎日毎日)少しずつ、段階を追つて」のように解

積されるであろう。

このように疊字「漸漸」は「漸」字で表現される「動作そのもの、状態の変化そのものが緩慢である」という意味を「漸」字を繰り返すことによって強調し、「動作や状態の変化の一つひとつ、一段階一段階を際立たせる」という効果をもつものであったと考えられる。また、この強調が「動作や状態の変化の一つひとつ、一段階一段階を際立たせる」という、「動作や状態の変化そのもの」の強調であるが故に、疊字「漸漸」は、「特定の時刻が迫っていること」という意味を有することがなかったとも考えられよう。古記録における「漸」字と疊字「漸漸」の使い分けは、両者の意味的な相違に起因していたと考えられるのである。平安時代から鎌倉時代の公家日記で使用される「漸」字と疊字「漸漸」の用例数の差も、疊字「漸漸」が「漸」字の強調であると考えることで説明できるであろう。

四、「漸漸」の読み

本節では疊字「漸漸」がどのような読み方をされていたのか、どのような読みを担った漢字表記であったのかについて考察してみたい。

古辞書を検索すると、『前田本色葉字類抄』では「ゼムく」（下巻一〇九オ）と音読した形で登載されており、後の『明応五年本節用集』『饅頭屋本節用集』『黒本本節用集』『易林本節用集』にも「ゼンく」の音読形で登載されている。しかし、『文明本節用集』では音読形では登載されず、「ヤウく」と訓読した形で登載されていて、『饅頭屋本節用集』『黒本本節用集』『易林本節用集』には、音読形とともに訓読した形でも登載されている。このことからすれば、疊字「漸漸」は、音読される場合と訓読される場合との二つがあり、並行して行われていたことが理解される。

訓点資料において疊字「漸漸」がどのように読まれていたのかを調査しても、音読形と訓読形の両者が観察される。

《訓読形》

○此の因縁に由(り)て、衆一人徳を慕^こヒ、漸漸ク化に歸して、王も瞻部洲のヒトモ皆共(に)誠一心をもて三寶に歸一敬しき。(東大寺図書館藏地藏十輪經元慶七年点・无依行品第三之二・二七七行)

○次には之を教(フ) 當に用^{ヤウ}キ^{ヤン} 漸々^{ヤウヤン} 稍^{スコフ}ラ小從(リ) 起^{オコ}ス (石山寺本沙彌十戒威儀經平安中期角筆点・八三行)

○若(シ) 病者(の) 氣力、漸々^{ヤウヤン} 弱^{ヤク} 劣^{レツ} ならむ時^{トキ}には云^{イハ}ふ應^{オウ}し。(最明寺本往生要集中卷九七オ・朱点)

○或(いは) 漸々^{ヤウヤン} 略^{レツ} を取(り)て念^{ネン}す應(し)。(最明寺本往生要集中卷九七ウ・朱点)

○耳に漸漸ク障外の聲を聞(き)、眼に漸漸ク障外の事を見、鼻に漸漸(く) 障外香を聞(く)、(立本寺藏觀普賢菩薩

行法經・承德三年移点本)

○漸^{ヤウ} 々^{ヤン} 二他^{ニタ}を逼^{ヒト}メ來^キル。(醍醐寺本遊仙窟・三一オ)

『音読形』

○〔則〕淨心の勢力、漸々^{ヤウヤン}に増長す。(高山寺本大毘盧遮那成仏經疏卷第二永保二年点・二四〇行)

○或(いは) 漸^{ヤウ} 々^{ヤン} 略^{レツ} 「ヲ」取(り)「テ」念^{ネン}「フ」應(し)。(最明寺本往生要集中卷九七ウ・鍵括弧内は墨点)

○何^{イカニ}況^{カヤ}・轉展隨喜之功^{テンゼンズイキノコト} 德^{トク}・漸^{ヤウ} 々^{ヤン} 廻^{クハ} 向^{ムク}之^ノ薰^{クハ} 修^{シュ}乎^ヤ。(久遠寺藏本朝文粹卷第十・慶保胤「於六波羅蜜寺供花會賦一稱

南無佛詩序」)

○半^ハ 錢^ネ所^ノ施^{ホトク}・一^{ヒト} 粒^{リツ}所^ノ拾^{スル} (途^チ 漸^{ヤウ} 々^{ヤン} 合^{アハ}セ^セ 力^カ) (反) 微^ヒ 々^ヤ 成^ナレ^ル 功^{コト}。(久遠寺藏本朝文粹卷第十三・善道統「為空也上

人供養金字大般若經願文」)

○五嫂^{イハ}カ・曰^{イハ}ク・向^{イマ} 來^{マシ} 々^ヤ 入^イ 深^シとムツマシ「也」。(醍醐寺本遊仙窟・二二ウ)

○五娘^{イハ}カ) 曰^{イハ}ク・向^{イマ} 來^{マシ} 々^ヤ 遜^{シツク}ハ^ハ不^ズ、漸^{ヤウ} 々^{ヤン}に深^シ入^イヌレ「ハ」^(擦消)「也」。(醍醐寺本遊仙窟・二五ウ)

平安初期の『東大寺図書館藏地藏十輪經元慶七年点』などからすれば、疊字「漸漸」が「ヤウヤク」と読まれていたことがわかる。一方、音読された例は院政期以降の訓点資料に見られるようになる。ただし、院政期以降、疊字「漸漸」

古記録における「漸」と「漸漸」の意味・用法について

がすべて音読されるようになるということではなく、『最明寺本往生要集』『醍醐寺本遊仙窟』の例からわかるように、訓読される場合と、音読される場合とがあったようである。

以上のような検討結果から直ちに、疊字「漸漸」が音読されるようになるのが院政期以降であるという結論を導き出すことはできない。疊字「漸漸」の音読形が見られる『高山寺本大毘盧遮那成仏経疏永保二年点』では、音読された「漸」には、音合符とともにラコト点「に」が付され「漸―漸に」の形になっているのに対し、「ヤウヤク」と読まれたと考えられる「漸」には、ラコト点「く」が付されて「漸く」の形になっている。『最明寺本往生要集』でも音読された「漸」には、音合符とともに仮名「二」が付されて「漸―漸二」の形になっているが、「ヤウヤク」と訓読される場合には、ラコト点「く」が付されて「漸々く」「漸く」の形になっている。

○以―後に齋―施「セウ」漸く増す「ヤウヤク」・(高山寺本大毘盧遮那成仏経疏永保二年点・卷第二・一九二行・鍵括弧内は長治点)

○彼に由「マナシ」(り)て漸く現世の因果を識「メ」(る)か如「ク」・(高山寺本大毘盧遮那成仏経疏永保二年点・卷第二・一九八行)

○又漸く眸「マナシ」を廻「マナシ」らして、(最明寺本往生要集上卷四九ウ・朱点)

○漸く佛「ク」の所「フ」に「ミモト」至「メ」(り)ぬ。(最明寺本往生要集上卷四九ウ・朱点・鍵括弧内は墨点)

これに注目するならば、一つの資料内で「漸く」と「漸漸に」とが読み分けられていた場合、「漸漸に」は音合符が付されていないことも、「ゼムゼムニ」と音読されたと考ええることができる。とすれば、『石山寺藏本法華経玄賛淳祐古点』の次掲例は、疊字「漸漸」が平安中期に音読されていたことを示す例であると考えられる。

○漸漸に各「タ」一足「を」増「セ」せり。(石山寺藏本法華経玄賛淳祐古点・卷第六・六三二行)

▽觀―心漸「ク」ク勝「メ」(り)ぬ。(同右卷第三・五〇四行)

▽漸「ク」ク減「メ」ジ (同右卷第三・九四一行)

▽根性漸「ク」ク成「メ」(り) (同右卷第六・八四〇行)

ただ、疊字「漸漸」が「ヤウヤクニ」という形で読まれたこともあり（先掲『醍醐寺本遊仙窟・三一〇』の例）、「漸」字が「ヤウヤクニ」と読まれたことも次掲例のように確かである。したがって、「漸漸」の形がすべて音読されたとしてもできない。

○思漸（ク）ニ除ル、コトヲ得タリ、（興福寺本大慈恩寺三藏法師伝巻第二・一二九行）

○法師漸（ク）ニ近（ツキ）ヌト聞（キ）テ、（同右巻第五・三三三行）

○是（の）如（く）漸（く）に人を染（す）（石山寺藏大唐西域記長寛元年点・巻第一・一六三行）

○氣序漸（く）に寒（く）して（同右・巻第四・一四一行）

○五常漸ヤウヤクに習ひ十善鑽仰す。（西教寺本秘藏宝鑰巻上）

○五常十善漸（ク）に修習す。（同右）

右に見てきたように、古辞書や訓点資料による限りでは、古記録に使用される疊字「漸漸」が音読されたものなのか、訓読されたものなのかを決定することは困難である。古記録における疊字「漸漸」も、音読と訓読の両様があったのかもしれない。しかし、前節で述べたような「漸」字と疊字「漸漸」の意味的な相違を考慮に入れるならば、「漸」字と疊字「漸漸」が常に「ヤウヤク」と読まれていたと考えることは難しく、むしろ「漸」字が「ヤウヤク」、疊字「漸漸」が「ゼムゼム」と読み分けられることが多かったのではないかと思われる。国語副詞「ヤウヤク・ヤウヤウ」は、中世以降意味変化を起こし、現代語の「やっと」の意味に使用される例が見えはじめる。⁶⁾古記録に使用される「漸」字において、そのような意味変化がどのように生じてくるのかについては、調査・検討が不十分であり、今後、調査年代・資料を広げ、詳しく考察する必要があるが、次に掲げる例などは、現代語における「やっと」と同じ意味で用いられたと考えられるであろう。

○予示信定云、若君尤可御他所歟、此殿已爲戰場、事及危急者尤不便歟、信定申女房、若君此間御不例、仍他所之

儀無便宜之由女房被答、小時兼時朝臣參來所陳同心、又申女房漸承諾、(明月記・元久二年閏七月二十六日)

○御馬未到也、御馬不到來者、不可請取御幣之由、伊勢衛士等支申之、…然間上卿辨等召寄伊勢衛士、先可請取御幣、若寮家無沙汰者、爲上卿辨可被付御馬之足(代百足云々)之由、被宥仰之、漸欲承伏時分、自左馬寮御馬之代到來云々、(康富記・文安四年九月十一日)

古記録に使用された「漸」字は「ヤウヤク」訓を担うものであったが故に、国語副詞「ヤウヤク・ヤウヤウ」の意味変化を反映するのであろう。しかし、これまでに調査した限りでは、疊字「漸漸」には現代語「やつと」の意味で用いられたと解釈されるような例が見られないのである。これは、疊字「漸漸」が「ヤウヤク」と読まれていなかったか、読まれていても、その数が少なかったことによるのではないかと推測される。今後更に、このような読みの問題とともに、疊字「漸漸」に意味の変化が見られるのかどうか、調査範囲を広げ、検討することを課題としたい。

むすび

古記録において「動作や状態の変化が緩慢であること」を意味する副詞として用いられる「漸」字と疊字「漸漸」について、その使い分けを検討するために、第一節では中国古典における「漸」字と疊字「漸漸」の使い分けを『妙法蓮華経』を中心に考察し、字数合わせの原則を見出した。第二節では、日本漢文のうち、中国古典の文章様式・文章構成の影響を大きく受けていると考えられる文章(漢文の作成を志向するもの)では、中国古典における字数合わせの原則をそのまま受け継いで使い分けがなされていることを述べた。第三節では、いわゆる古記録に使用される「漸」字と疊字「漸漸」との意味的な相違点を考察し、「漸」字が「動作そのもの、状態の変化そのものが緩慢であること」と「時間の推移の結果、特定の時刻が迫っていること」という意味を有するのに対して、疊字「漸漸」は「動作そのもの、状態の変化そのものが緩慢であること」という意味を有し、「時間の推移の結果、特定の時刻が迫っていること」という意味を有さ

ないことを述べた。更に、豊字「漸漸」は「漸」字で表される意味を強調し、「動作や状態の変化の一つひとつ、一段階一段階を際立たせる」という効果を有するものであることを述べた。すなわち、古記録における「漸」字と豊字「漸漸」の使い分けは、このような意味の相違に基づくものであったと考えた。第四節では、豊字「漸漸」の読みについて古辞書ならびに訓点資料を基にして考察した。古辞書と訓点資料による限り、豊字「漸漸」は「ヤウヤク」と「ゼムゼム」の両様の読み方があり、平安時代から鎌倉時代にかけて両者が並行して行われたと考えられる。しかし、「漸」字と豊字「漸漸」との使い分けが、意味の違いに基づいていることからすれば、豊字「漸漸」が「ゼムゼム」と音読され、「ヤウヤク」と読まれていた「漸」字と区別されることが多かったのではないかと推測した。

このように、古記録において「漸」字と豊字「漸漸」との間に意味的な違いが存するとすれば、「漸漸」を仮名文学語「ヤウヤウ」、漢文訓読語「ヤウヤク」との三位相対立の用語として位置付けることが妥当なのか否か、問題になつてくるように思われる。この点については、結論を急がず、更に考察・検討を深めていきたい。

本稿では、古記録における「漸」字と豊字「漸漸」との使い分けを明らかにすることを目的としたために、「漸」字で表されるところの「ヤウヤク」や「ヤウヤウ」の意味変化との関係を十分に捉えきれなかった。また「動作や状態の変化が緩慢であること」を意味する副詞語彙全体の中で、豊字「漸漸」を捉えることもできなかった。今後は、類義の副詞語彙の中で豊字「漸漸」を再検討する必要がある。特に、中世に入つて古記録の中で盛んに用いられるようになる「次第に」との関係も、「次第に」の意味変化と合わせて検討する必要がある。また、「徐々に」「段々と」といった漢語副詞との関係も中世後半期から近世を視野に入れて考察する必要がある。

注

(一) 『平安時代古記録の國語學的研究』(東京大学出版会、昭和六十一年二月) 五三六頁、八三六頁参照。

(2) 公家日記に使用された「漸」字・連文「漸漸」の用例数は、一度だけの調査によるものであり、見落とした例もあろうと思われる。今後再調査して正確を期したい。なお、「大漸」「鴻漸」「東漸」などの例は「漸」字の用例数には含めなかった。本論に示した以外の公家日記における用例数は以下のようになっている。

台記(漸―二八・漸漸―三)、山槐記(漸―一三・漸漸―一)、玉葉(漸―一七・漸漸―一〇)、吉記(漸―三〇・漸漸―一〇)、明月記(漸―四九九・漸漸―二四)、三長記(漸―七・漸漸―一)、玉藻(漸―二〇・漸漸―四)、岡屋関白記(漸―七・漸漸―一〇)、平戸記(漸―五八・漸漸―一〇)、経俊卿記(漸―一五・漸漸―一)、妙槐記(漸―二・漸漸―一〇)、吉統記(漸―七・漸漸―一〇)、勤仲記(漸―二三・漸漸―一)、園大曆(漸―二九・漸漸―一)、康富記(漸―一六・漸漸―二)、満濟准后日記(漸―一八・漸漸―一〇)、看聞御記(漸―九・漸漸―二)、後法興院記(漸―二・漸漸―一)

(3) 『史記』に用いられた「漸漸」については、王叔岷『史記對證 第五冊世家(一)』(中央研究院歷史語言研究所專刊之七十八、中華民國七十一年六月)に詳細な考証がある。また、『漢語大詞典』(漢語大詞典出版社、一九九〇年一月)も音の違いによって、別項目が立てられている。

(4) 注(1) 文献、四四頁参照。

(5) 『東大寺図書館蔵 宗性・凝然寫本目錄』(昭和三十四年三月)による。

(6) 濱田敦「やうく」から「やと」へ語の意味の変化の一例として(人文研究第四卷第六号、昭和二十八年六月)、国語副詞の史的研究所『新典社、平成三年十一月に再録』において、「ヤウヤウ」の意味変化が詳細に論じられている。また、佐々木文彦「やうやう」の意味・用法について(明海大学外国語学部論集第九集、一九九七年三月)では、『源氏物語』の中から、「やと」の意味に解釈される「やうやう」の例を指摘され、平安時代には「やうやう」の意味として「やと、かろうじて」の意が成立していたとされる。

〔附記〕

本稿は、平成十一年度鎌倉時代語研究会夏期研究集会における口頭発表を基にまとめたものである。席上、またその他の機会に、小林芳規先生をはじめ、鈴木恵、田中雅和、山本真吾、栞竹氏の各氏に有益な御意見を賜った。記して御礼申し上げる。